

(別紙様式3)

平成31年 3月 29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	東京都文京区大塚3-29-1
管理機関名	筑波大学附属学校教育局
代表者名	教育長 茂呂 雄二

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年 4月 1日 (契約締結日) ~平成31年 3月 29日

2 指定校名

学校名 筑波大学附属高等学校

学校長名 大川 一郎

3 研究開発名

小・中・高・大が連携した課題解決によるグローバル人材の育成

4 研究開発の概要

本校の教育方針(全人教育)を継続しつつ、

- ・平成26年度~「海外派遣」(希望生徒対象)を中心とした課題解決によるグローバル・リーダーの育成
- ・平成27年度~毎週土曜日を授業日とし、1, 2学年全生徒対象の「SGHスタディ」と称する総合的な学習の時間の設置。
- ・平成28年度~3学年全生徒も対象とした土曜日2時間の「SGHスタディ」の時間の設置。以上3年間で、全校におけるグローバル・シチズンの育成プログラムの完成。指導に関しても全教員で取り組む体制が確立された。
- ・平成29年度~それまでの開発プログラムを定着させ、効果測定を試行。
- ・平成30年度~開発プログラムを定着させ、効果測定を継続実施。改良にも取り組んだ。第1学年対象で開発実施した「課題解決のための技能修得」の授業の継続について、また、指定解除後の取り組みについて検討。

(1) 目的・目標

- ・国際性豊かなグローバル・シチズンの育成。
- ・世界で活躍し社会を牽引するグローバル・リーダーの育成。

(2) 現状の分析と研究開発の仮説

《現状の分析》グローバル人材が持つべき能力ごとに、現在の本校の取組を分析する。

- ・深い専門性と幅広い教養…レベルの高い教科教育とバランスの取れた教育課程。
- ・問題を解決する能力…問題解決型の授業。
- ・コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力…話す・聞く重視の英語教育他。
- ・主体性と協調性…生徒の自主性を重視した行事，委員会活動，部活動。
- ・異文化を理解する柔軟性と日本人としてのアイデンティティ…多様な人々を認める環境。
- ・高い語学力…少人数生徒の指導と第二外国語(ドイツ語，フランス語，中国語)の授業。
- ・議論し交渉する能力…生徒の自主性を重視した行事，委員会活動，部活動。
- ・地球規模の視点…海外研修や相互短期留学。

これらの取組の充実のため，SGH 活動の時間を確保し，少人数を対象にした授業が必要。

《研究開発の仮説》グローバル人材が持つべき能力は，問題解決学習の中で育成できる。

課題の発見→調査・研究→グループによる議論→解決法の発表・提案

(3) 課題研究内容等

①課題研究

社会的に関心が高く生徒が自ら課題を見つけやすいものとして，次の3つを設定。

- オリンピック・パラリンピックにおける諸課題 「フェアプレイ精神の実現の方法」
「アマチュアリズムとプロフェッショナルリズムの問題」
「オリンピックと戦争の影響」
などの課題を取り上げて調査研究する。
- 地球規模で考える生命・環境・災害 「遺伝子組み換え」
「地球温暖化防止」
「捕鯨と日本文化」
「気候変動」など今日的な課題を取り上げて踏査研究する。
- グローバル化と政治・経済・外交 「戦後の国際経済の歩み」
「国際的な資金の動きの現状と課題」
「日本企業の海外進出の国内外の経済への寄与」
などを取り上げて調査研究する。

②実施方法

- オリンピック・パラリンピックにおける諸課題
 - ・筑波大学及び附属 11 校での「オリンピック教育」と連携して講義や施設見学を行う。
 - ・「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」へ参加する生徒には，イングリッシュルームへの参加を義務づけ，専門家による課題の指導や英語及びプレゼンテーションのスキルトレーニング等を行う。
- 地球規模で考える生命・環境・災害
 - ・英語による発表や討論のために，イングリッシュルームへの参加を義務づけ，専門家による課題の指導や英語及びプレゼンテーションのスキルトレーニング等を行う。
 - ・課題の研究成果については英語による論文作成、発表を基本とし、取組への意欲、実践とともに優れた生徒には海外でのフィールドワーク・討論等の機会を与え内容を深める。
- グローバル化と政治・経済・外交
 - ・課題に応じて専門家による講演・講義・指導を実施する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
【幹事校管理機関】 1 連絡協議会・連絡会			29日									
【管理機関】 1 全国高校生フォーラム									15日			
2 運営指導委員会の開催						22日						
3 SGH 調整会議			19日				10日		5日		20日	
4 SGHプログラム												
(1) 事前事後研修 ICT の活用・カガ UBC へ派遣				10日間				2日間				
(2) JGLP						12日間						
(3) 香港大学へ派遣												12日間
(4) カリフォルニアへ派遣												8日間
(5) ハワイ大学へ派遣												9日間
5 事務補佐員配置	1日											
6 海外交流アドバイザー配置	1日											

(2) 実績の説明

① SGH指定校・アソシエイト連絡協議会・連絡会を6月に開催

SGH指定校・アソシエイト連絡協議会・連絡会を平成30年6月29日(金)開催。SGH指定校123校、アソシエイト55校、各教育委員会など関係者約300名を対象に、SGHの関係者が各校における研究の進捗状況や課題などについて情報共有を図ることを目的に行った。

連絡会分科会第一部は、カリキュラム研究開発事例と題して8会場に分かれ、1会場指定校3校計24校の教員による発表が行われた。カリキュラム開発に焦点化して議論・共有するために、具体的にどのようなカリキュラムを開発し運用しているかについて各指定校から発表が行われた後、ディスカッションにより深い意見交換と交流が行われた。

第二部は、先進事例報告と題して8会場に分かれ、指定校8校の教員及び5つの連携機関等による報告が行われた。各指定校から、海外フィールドワークやサミット・フォーラムの実施、国内外の大学・企業・国際機関等との連携、特徴的な教育プログラムの実践など、先進的な取組について報告が行われ、活発な質疑応答が行われた。

その他、大川一郎筑波大学人間系教授・附属高等学校長による「SGH5年間の成果をどう次に繋げていくのかー今後を見据えてー」と題した講演が行われた。

多くの指定校において、教科横断的なカリキュラム開発や海外研修を含めた体験的な学習など、単なる英語力の強化に留まらない、より汎用的な能力の育成を目指すための、先進的な取り組みが意欲的に実施されている。その多様な成果を広く共有するために分科会において発表された内容を事例集として取りまとめ、SGHのホームページに掲載。連絡協議会・連絡会を通して各校の連携が深まり、研究開発が更に推進されることが期待される。

② SGH全国高校生フォーラムを12月に開催

同年12月15日に文部科学省・筑波大学主催による「スーパーグローバルハイスクール(SGH)全国高校生フォーラム」が、東京国際フォーラムを会場に開催。

SGH指定校123校・アソシエイト18校、開催地である東京都の高等学校5校の代表生徒や留学生が一堂に会し、英語でのポスターセッションやディスカッションを通して、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題・ビジネス課題の解決や提案について英語で発信する場を設けるとともに、今後の課題研究の深化や意欲の向上を図る目的で開催。

生徒によるポスターセッション及び生徒交流会【テーマ別分科会】をグループ別に分け、午前午後入れ替え制で行われた。

ポスターセッションでは、日頃の学習や課題研究の成果を発表し、広く普及する場とするとともに、他の発表に触れてグローバルな社会課題に対する見識を深め、お互いに刺激を受ける場とする事を目的に、各校の生徒がポスターを介して参加者や審査委員に対し各自の取組・課題研究等のプレゼンテーションを英語で2回ずつ行い、その発表に対し活発な質疑応答が交わされた。

生徒交流会【テーマ別分科会】では、テーマごとに近い課題意識をもった生徒が集まりディスカッションする機会を通じて、それぞれの課題研究を深めるとともに、他校の生徒や留学生とつながり、テーマを通じたネットワークを作る等、後の研究の糧となるようなきっかけづくりを行うとともに、テーマ別の小グループや全体でのディスカッションを通して、グローバルな社会課題について英語で議論する力や積極性を養うことを目的に、10のテーマで論じ合った。

その後行われた生徒交流会【全体会】では、テーマ別分科会に参加した約450名の生徒達が、分科会で学び合ったことを基に、「持続可能な社会をつくるために、高校生の私たちに何ができるか？」を課題として、論じ合った。留学生を含め、積極的に発言する様子が見られた。

終了後にポスターセッションの優秀校が発表され、早稲田大学高等学院、神奈川県立横浜国際高等学校、立命館慶祥中学校・高等学校、神戸大学附属中等教育学校の4校がステージ上でプレゼンテーションを行った。

続いて行われた表彰式では、ポスターセッション発表校の生徒による「生徒投票賞」に、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校、立命館宇治中学校・高等学校、青山学院高等部、名古屋国際中学校・高等学校の4校が受賞。また、アソシエイト、東京都の学校から「審査委員長特別賞」に啓明学園中学校高等学校、東京都立小石川中等教育学校の2校が受賞。ポスターセッション優秀校4校のうちから立命館慶祥中学校・高等学校が「文部科学大臣賞」を、早稲田大学高等学院、神奈川県立横浜国際高等学校、神戸大学附属中等教育学校3校が「審査委員長賞」を受賞。続いて、中村裕之文部科学大臣政務官よりメッセージをいただき閉会となった。

全国47都道府県からSGH指定校、アソシエイトの高校生等関係者を含め約1,100名の参加があった。ポスターセッションで発表されたポスター及び要旨をSGHのホームページに掲載。今回のフォーラムをとおして5年目を迎えたSGH事業の更なる深化と、その成果の普及を図ることが期待される。

③SGH専用ホームページを開設、webサイトを運用して取り組み内容を発信

平成26年9月1日にSGH専用ホームページを開設し、SGH構想の概要やSGH指定校情報を掲載し、SGH指定校から寄せられる活動予定や活動報告等を随時更新して発信することにより、各校の取り組みについて情報等の発信を広く行った。

平成30年11月投稿数3千件突破。平成30年度末現在 投稿数410件（昨年度890件）

平成30年10月にアクセス数60万回を突破

また、同時に専用ホームページ内に「指定校アソシエイトSNS」を開設し、日記やアルバムにより指定校・アソシエイトの活動情報が自由に掲載でき、サイト内のコミュニティは活発な情報交換・意見交換の場となっている。

平成30年度末現在 メンバー登録数172件・書き込み数2286件

④運営指導委員会の開催

平成 30 年 9 月 22 日（土）に開催した第 6 回会議では、①平成 30 年度 S G H 研究の進捗状況②平成 31 年度事業計画について報告を行い、各委員からこれまでの取組に対する意見、今後の取組への提言が出された。

⑤ S G H 調整委員会の設置

幹事校管理機関として、附属高等学校が S G H 指定校の幹事校の役割を十分に果たせるように、附属高等学校教員、筑波大学教員及び附属学校教育局教職員を構成員とした第 1 回筑波大学附属高校 S G H 関連「効果測定」検討会議を平成 26 年 6 月 14 日（土）に開催、以後、平成 27 年度において調整委員会を継続し、平成 28 年 3 月までの間に月 1 回の頻度で合計 10 回の会議を開催した。

また、組織的に推進するため、平成 28 年度より筑波大学附属学校 S G H 調整会議と改称し、新たに附属坂戸高等学校教員を構成員とし、平成 28 年度 4 回、平成 29 年度 5 回、平成 30 年度 4 回、① S G H 進捗状況② S G H 全国高校生フォーラム・ S G H 連絡協議会・連絡会③平成 31 年度実施計画書等について、企画・立案・検討等を行った。

⑥筑波 S G H プログラムの開発

幹事校管理機関である附属学校教育局は、筑波大学グローバル人材開発リサーチユニットと連携したプロジェクトチームを発足させ、 S G H 高校生向けに、将来、グローバルリーダーとして、異文化環境で直面するであろう、様々な課題を自律的に解決するための「グローバルマインドセット」を体系的に育成する、筑波 PPDAC モデル（体験型の問題解決のための学習モデル）と研修プログラムを開発した。

筑波 S G H プログラム開発は、(i) オール筑波による高大連携、学際的研究のメリットを活かした独創的な次世代グローバル人材育成プログラムの開発、(ii) 事前研修⇒海外現地研修⇒帰国後の効果測定を組み合わせた一貫性のあるアクション・ラーニングプログラムの開発、(iii) ICT（Chromebook 等）を活用した学習、情報収集及び分析技法の導入、(iv) メンバー校への協力の呼びかけと、幹事校としての育成モデルのフィードバックの 4 項目を基本方針としており、初年度である平成 26 年度は、①筑波 PPDAC モデル開発のための S G H 指定校及びアソシエイトの帰国生・一般生を対象としたインタビュー調査、②研修プログラム開発のため、附属高等学校の生徒を対象とし ICT(Chromebook)を活用した、筑波-UBC 研修の事前研修を実施。平成 27 年度は、事前研修をグローバル教養 I ・カナダ UBC 研修(FGL)をグローバル教養 II とし、筑波大学の授業科目に登録。8 月カナダ UBC 研修へ 23 名派遣し修了。2 単位の履修証明書を授与。平成 28 年度については、 S G H 校・アソシエイトへ参加枠を広げ 6 校 29 名が修了。筑波大学附属高等学校 1 名に 2 単位の履修証明書を授与。平成 29 年度 8 校 25 名が修了。筑波大学附属高等学校 12 名に 2 単位の履修証明書を授与。平成 30 年度 8 校 25 名が修了。筑波大学附属の高等学校生徒 5 名に 2 単位の履修証明書を授与。いずれの年度も、研修前・研修後に TOEFL 及びグローバルマインドセットを活用した研修効果測定を実施。さらに全国の S G H 校・アソシエイトを対象とした 3 つのプログラムを開発。平成 30 年度は、 S G H 以外の高等学校等にも参加枠を拡大、①平成 29 年度筑波-香港大学グローバルリーダーズ・プログラム(3 月下旬派遣)16 校 27 名が修了。平成 30 年度 21 校 29 名が参加、②2018 筑波-ハワイ大学 STEMS²プログラムを 8 月にハワイ島にて予定していたが、キラウエア火山の噴火による影響により中止を決定。その後実施について検討し、マウイ島にて実施可能となり 3 月下旬に 21 校 29 名が参加、③2018 年度 筑波-WISTEAM プログラム(3 月下旬派遣) 14 校 14 名が参加。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間(30年4月～31年3月)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
オリンピック教育に関連する諸課題の調査研究等	オリビズムに関する学習・国内ユースフォーラム事前研修											フォーラム
SGHスタディの検討	全学年での実施および総括											
海外研修事前学習・現地交流等 新たな海外研修先等の開拓	事前研修		研修①②		事後報告	研修③	事後報告				研修④	
						次年度プログラム検討						
「模擬国際ビジネス交渉」等を通じた交渉能力の向上 グローバル人材育成プログラムの開発						模擬国連				人材育成プログラムの開発		

(2) 実績の説明

①オリンピック教育に関して

保健体育科を中心とする日々の授業や学校行事、部活動等、学校における教育活動全般にわたって「オリビズム」を学ぶ姿勢は、嘉納治五郎校長のころから本校が取り組み、いまでも受け継がれている。特に保健・体育理論の授業は、オリンピックやパラリンピックの歴史と現状、今後の課題などを学び、生徒の問題意識を育む貴重な場となっている。体育実技の授業においても教師の専門性を生かした教員配置を行い、種目の特性を深く味わいながらスポーツの魅力を体感できるよう心掛けている。

保健体育科以外の教科でも、2020年東京オリンピック・パラリンピックという身近なトピックが授業で取り上げられることが増え、生徒の興味関心を刺激している。

このような教科学習を踏まえ、2～3年次のSGHスタディでは、第1分野「オリンピック・パラリンピックについての諸課題」を開設し、課題研究への取り組みが為されている。3年生で「オリンピックとパラリンピックの同時開催」を取り上げた班はポスター発表部門で、「ボールが縦に変化するフリーキックを蹴りやすくするサッカーシューズの研究と開発」班は実験部門で優秀賞を獲得した。2年生は修学旅行先のシンガポールと関連づけた課題設定を試みており、今後の研究成果が期待できる。

一方、校外、そして世界への広がりについては2年に一度開かれる「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム(国際YF)」が挙げられる。2017年8月にエストニアで開催された第11回大会には、本校から生徒1名が派遣され、23か国から集まった約120名の高校生とともにスポーツやアート活動、座学や討議などを通してオリビズムを学んだ。

また、第12回大会は2019年8月にフランスで開かれる予定で、日本からの派遣生徒7名の選考会を兼ねた「クーベルタン-嘉納ユースフォーラム(国内YF)2018」が2018年12月23日～25日に筑波大学で開かれた。本校生徒は11名が応募し、11月から定期的に勉強会を行い準備を進めた。このほかにも筑波大学が主催するボランティア講座など、各種セミナーに意欲的に参加する生徒もいる。これらの機会は、オリンピックやパラリンピックの真の意義を学び、同世代の他校生との交流を深める場となるであろう。

②グローバル・シチズンの育成をめざすSGHスタディに関して

平成 26 年度の制度設計に基づき、また平成 27～29 年度の反省事項を踏まえて、引き続き全学年でSGHスタディを実施した。

・ 1 学年対象のSGHスタディ（「1スタ」）

平成 27～29 年度と同様に、1 時間のオリエンテーションのあと、8 人の教員が、「科学的な考え方」「統計的なものの見方・考え方」「データの収集」「データの分析」「書籍等による情報収集」「プレゼンテーションタイトルの作成」「グループでの活動方法を考える」「アカデミック・ライティング」の各テーマに沿って各クラス 3 時間ずつの授業を行った。なお、教員の異動のため担当者の交替はあったが、内容には変更がない。

・ 2 学年対象のSGHスタディ（「2スタ」）

2 学年のSGHスタディは通年で毎週土曜日 3 時限に設定している。課題研究の流れはおおむね平成 27～29 年度と同じだが、2 学年担任団の意向も踏まえ、秋に行われた修学旅行（行き先：シンガポール）に関する学習とSGHスタディを連動させる形をとった。具体的には

ア 課題研究に関するガイダンスを前倒して 1 学年の終わりに行き、そこでシンガポールに関する講演会も行った。

イ 2 学年の最初すぐにグループ作りを行った。その際、研究課題は、シンガポールと関連させることを必須とした。

ウ 修学旅行の日程に、課題研究に関するフィールドワーク（施設訪問やインタビュー等）を行う日を設定し、全グループでフィールドワークを実施させた。

エ 修学旅行をはさんで、秋と冬の 2 度、中間発表会を行った。

・ 3 学年対象のSGHスタディ

平成 29 年度までと同様に、2 学年から開始した課題研究を継続させ、研究論文にまとめさせた。3 学年のSGHスタディは前期（4 月～9 月）の土曜日 3・4 時限に設定している。

昨年度までは、課題研究の最終報告会は 8 つ程度の分科会に分かれての口頭発表で行っていたが、今年度は

ア 全グループの発表に全学年生徒が触れる機会を設けたいこと、生徒による相互評価も導入したいこと

イ 課題研究の評価や優秀研究グループの選出・表彰にあたり、なるべく多くの教員が関わられるようにすることから、体育館を使用してのポスター形式の発表に変更した。

③グローバル・リーダーの育成をめざすSGHプログラムに関して

SGHにおけるグローバル・リーダー育成の取り組み（SGHプログラム）を行った。

平成 30 年度の取り組みは、平成 30 年 7 月のシンガポールのアジア・太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）への 3 名の派遣、韓国の国際シンポジウム（IAS）への 3 名の派遣、7 月、8 月のカナダのブリティッシュコロンビア大（UBC）で行われたUBC研修への 4 名の派遣、8 月のカナダのプリンスエドワード島大（UPEI）で行われたUPEI研修への 16 名の派遣、10 月の北京市高校生との交流事業への 10 名の派遣、平成 30 年 3 月のシンガポールHWA CHONG校で行われた短期留学への 7 名の派遣であった。

派遣生徒は、派遣前に、数回にわたる外部講師による海外事情についての講演などの受講を通して、海外の情勢についての理解を深め、グローバルな課題について調査・研究を行っ

てその解決策を模索した。その成果を派遣先において英語で発表し、集った各国・現地の高校生と直に英語で討論・意見交換を行ったり文化交流を行ったりしてグローバル・リーダーとしての資質を磨いた。派遣後は、派遣に関わる体験と成果を本校全生徒に報告し、学校全体で成果の共有をはかったうえで、派遣と課題探求活動等に関する報告書を作成した。

グローバル・リーダー育成に向けた本校独自の海外研修として8月にカナダ・プリンスエドワード島のプリンスエドワード大学（UPEI）での研修に16名の生徒を派遣した。この研修では、本校SGHにおける大きな3つの柱のうち、地球規模で考える生命・環境・災害とグローバル化と政治・経済・外交をテーマとした講義がUPEIのプログラムの中に盛り込まれた。平成30年5月にUPEIへの派遣生徒を選考し、5月から7月まで派遣前の研修を行った。このUPEI派遣前研修では、語学指導助手の指導のもと、英語によるコミュニケーション能力と英語によるプレゼンテーション能力の向上をめざした。また、現地では生徒各自のプレゼンテーションを通じて、その定着をはかった。

④その他

・「SGH事業の検証に関する有識者会議（第3回）の本校での実施」

平成30年4月23日（月）11：30～13：30 於：本校 3階会議室

出席者：帯野久美子氏 河村小百合氏 永井裕久氏 二宮皓氏 松本茂氏

内藤徹氏（萱島信子氏代理）長尾篤志視学官 小幡泰弘国際教育課長 佐藤由郎室長補佐
矢田裕美係長

議題：

○ SGH事業指定校の取組説明と授業視察

○ 海外研修参加生徒との懇談（本校、シンガポール、韓国等への派遣生徒5名との懇談）
⇒ 生徒の声を直接聞いていただくことで、生徒の更なる希望や本校の取り組みの効果をお伝えすることができた。

- ・「効果測定」：29年度に生徒用・教師用アンケートをそれぞれ作成した。指定校がWEB上からダウンロードして継続利用している。
- ・「海外からの来校者」：29年度までと同様、海外からの本校への来校者が多くあった。特にそれまでの高校生の来校に加えて、多くの教育者の皆さんの来校が増加した。
- ・「講演関係」：例年の通り、国際的に活躍している卒業生による講演などを実施。今後も積極的に継続していきたい内容である。
- ・「実施報告書」：「SGH研究開発実施報告書～平成30年度の取り組みを中心に～」の発刊
平成28年度に学校のSGHの体制ができあがり、その後の継続・発展・効果・継続の方向性をまとめたもの。
- ・「第4回SGH報告会」：「SGHスタディ」の授業公開及び3学年優秀研究発表会を公開。
SGH運営指導委員の先生方から批評をいただいた。

7 目標の進捗状況、成果、評価

① 「国際性豊かなグローバル・シチズンの育成」について

「国際性豊かなグローバル・シチズンの育成」について、SGHスタディ、特に平成29年度までと比べていくつかの変更のあった2・3学年対象のSGHスタディ（「2スタ」「3スタ」）を中心に報告する。

3スタでは、最終報告会の形をポスター展示によるものに変更したが、このことは生徒にとって他の多くのグループの研究を知ることにも寄与したとともに、指導する教員にとっても、3スタの全容を把握するよい機会になった。

今年度の3スタでは54の研究論文が提出され、それらの研究のなかには、SGH運営指導委員が激賞するような質の高いものも見られた。

一方で、今年度、最優秀賞を受賞した「公園から考えるまちづくり」、優秀賞を受賞した「小児がんについての理解」「データを用いたバス交通網再編の分析」のいずれもが、グローバルな課題に直接向き合っているとは必ずしも言いがたいことなど、研究テーマの設定については課題を残した。

2スタは、修学旅行先が海外ということもあり、初めて全面的に修学旅行のための学習と連動させた。これによって、生徒は否応なく「グローバル」な課題に取り組まざるを得なくなり、さらに必ず現地でのフィールドワークを実施することになった。これは、生徒のグローバルな資質を高める点で大いに効果があったものと考えられる。

ただし、修学旅行の行き先が固定されていない本校において、このような取り組みをどのように継続し積み重ねていくかは課題である。

この点について、SGH運営指導委員からは、「必ずしも海外に行く必要はなく、『日本にある海外（留学生など）』と接することでもグローバルな視野を持つことは可能であろう」と示唆されている。

② 「世界で活躍し社会を牽引するグローバル・リーダーの育成」について

本校で従来から取り組んできた国際交流に伴う海外派遣事業を、「SGHプログラム」と名づけ、SGHにおけるグローバル・リーダー育成の取り組みとして発展させた。平成30年度の取り組みとしては、シンガポールのアジア・太平洋青少年リーダーズサミット（APYLS）への3名の派遣、韓国の国際シンポジウム（IAS）への3名の派遣、カナダのUBC研修への4名の派遣、8月のカナダのプリンスエドワード島大（UPEI）で行われたUPEI研修への16名の派遣、北京市高校生との交流事業への10名の派遣、シンガポールHWA CHONG校への7名の短期留学の6つの事業を推進した。いずれの事業にも多数の生徒の応募があったが、英語によるコミュニケーション能力と課題解決力に優れた生徒を書類審査と英語テストと面接により選抜した。

派遣生徒は、外部講師による海外事情に関する講演を受講して、海外情勢についての理解を深めた。また事前準備として、グローバルな課題を設定し、それに関する調査・研究を行った。派遣先においては、それらの成果を英語で発表して各国のトップレベルの高校生と討論・意見交換を行うとともに、文化交流も行った。このような機会を得た生徒は、英語によるコミュニケーション能力をより高めるとともに、海外のトップレベルの高校生と直接触れ合ったことで国内では得られない強烈な刺激を受け、自らの目標をより高いところに設定するようになり、学校内外の活動により積極的に取り組むようになった。また、各国のトップレベルの高校生との間に個人的な交友関係を築くことが出来たが、これは今後、派遣生徒にとってはリーダーとしての貴重な財産となると思われる。

APYLSとIAS、さらにUBCとUPEIの派遣事業終了後は、派遣に関わる体験と成果を平成30年9月に本校の文化祭、さらに同年9月のSGHスタディーの授業で報告し、本校生とそれらの共有をはかるとともに、校外の一般の方にも成果を公表した。また、それぞれの

取り組みごとに事業内容をまとめた報告書を作成した。

カナダ・プリンスエドワード島のプリンスエドワード島大学（UPEI）研修への生徒派遣事業では、8月に現地で英語のプレゼンテーションが出来るように、平成30年5月から7月までの3ヵ月にわたる派遣前研修を実施した。この研修は、英語によるコミュニケーション能力と英語によるプレゼンテーション能力の向上をめざして、語学指導助手の協力を得て行った研修で、受講した生徒は、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を着実に伸ばした。

もともと意識が高く意欲的な生徒たちが、これら一連の事業に参加することによってグローバル・リーダーとしての資質を一層大きく伸ばすことが出来た。

<添付資料>目標設定シート

8 5年間の研究開発を終えて

(1) 教育課程の研究開発の状況について

平成26年度 「SGHプログラム（海外派遣）」（希望生徒対象）を中心とした課題解決によるグローバル・リーダーの育成の拡張

- ・それまでも行っていた「海外派遣」プログラムに加えて、筑波大学附属学校教育局と合同で「UBC（カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学）研修」を実施。
- ・本校のSGHへの取り組みとして、「SGHプログラム（海外派遣）」と「SGHスタディ（課題解決学習）」の2本柱で実施することを全教員で確認。
- ・27年度から生徒全員を対象として行う「SGHスタディ（課題解決学習）」の内容の検討、教員の体制作り。

平成27年度 毎週土曜日を授業日とし、1, 2学年全生徒対象の「SGHスタディ（課題解決学習）」と称する総合的な学習の時間の設置（グローバル・シチズンの育成）

- ・第1学年 ～「課題解決のための技能修得」の授業を通年で実施開始。8講座、8名の教諭が担当。
- ・第2学年 ～「グループによる課題解決学習」を3学年前期までの予定で実施開始。
3つの分野の指定 ●オリンピック・パラリンピックにおける諸課題
●地球規模で考える生命・環境・災害
●グローバル化と政治・経済・外交
- ・「SGH校内推進委員会」が研究開発の中心となり、毎週土曜日の委員会を通して、反省・改良の積み重ね。
- ・「第1回SGH活動報告会」にて、1, 2学年「SGHスタディ」の授業公開。

**平成28年度 3学年全生徒も対象とした土曜日2時間の「SGHスタディ」の時間の設置。
（全校におけるグローバル・シチズンの育成プログラムの完成）**

- ・全教員で指導にあたる体制が確立。
- ・第3学年の課題研究発表会を公開。SGH運営指導委員の先生方に講評をいただく。
- ・「SGHプログラム（海外派遣）」においては、新規研修として「UPEI（カナダ プリンスエドワード アイランド大学）研修」を開発、開始。

平成29年度 それまでの開発プログラムを定着させ、効果測定を試行。

- ・毎週の土曜授業を継続し、前年度の研究実績を還元。
- ・中間評価の指導内容を受け、生徒及び教員へのアンケートを実施し、定着の度合いを確認。

- ・「第3回 SGH 活動報告会」にて、1, 2 学年「SGH スタディ」の授業及び3 学年「SGH スタディ」における優秀研究発表会を公開。海外派遣生徒による報告を実施。

平成 30 年度 開発プログラムを定着、改良し、効果測定を継続実施。

- ・第2 学年における「グループによる課題解決学習」において、指定した3 つの分野と修学旅行（シンガポール）を関係付けての研究とした。修学旅行中に現地での実証、研究の義務付け。
- ・第3 学年における課題研究発表を、それまでのパワーポイントによる発表からポスターセッションの形に変えて実施。
- ・「SGH スタディ（課題解決学習）」の継続についての検討。第1 学年の取り組み（「課題解決のための技能修得」）が高評価であり、これを 2022 年の新教育課程実施と、どう繋げていくのかを検討。

(2) 高大接続の状況について

筑波大学 附属学校教育局との連携

本校は筑波大学の持つ附属学校 11 校の内の一つであり、附属学校教育局を管理機関としている。日頃も常に連携を図っているが、SGH に関しては、附属学校教育局が独自に開発した「海外派遣プログラム」に毎年本校生徒が参加している。

→ 「筑波・UBC（カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学）研修」

「筑波・ハワイ大学研修」「筑波・香港大学研修」

このプログラムは、日本での事前研修が充実しており、他校の生徒さん達との交流も深まり、最終発表会では英語でのプレゼンテーションが求められる。「筑波・UBC（カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学）研修」を修了すると、筑波大学の単位が一部与えられる。また、現在開発中のプログラムにも教員を現地に派遣し、連携・協力を図っている。

筑波大学との連携

- ・模擬国連への参加 ～ 筑波大学で行われる模擬国連に生徒を派遣
- ・「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（国際 YF）」に生徒を派遣（2 年に 1 度：国内は筑波大学が中心となっている）

第 10 回大会 2015 年 8 月 29 日～9 月 5 日（スロバキア）開催 本校生徒 3 名派遣

第 11 回大会 2017 年 8 月 19 日～26 日（エストニア）開催 本校生徒 1 名派遣

→ 23 か国から集まった約 120 名の高校生とともにスポーツやアート活動、座学や討議などを通してオリビズムを学んだ。

第 12 回大会 2019 年 8 月 24 日～31 日（フランス）開催予定

→ 事前に行われる筑波大学での国内ユースフォーラム 2018 に本校生徒 11 名が参加

海外の大学との連携

- ・UPEI（カナダ プリンズエドワード アイランド大学）との連携

平成 28 年度、新規に研修を確立。筑波大学 竹谷悦子教授のアドバイスをいただきながら、現地での打ち合わせを経て、本校独自の研修プログラムを共同開発。毎年本校より 16 名の生徒を派遣。

(3) 生徒の変化について

ここではまず、全生徒を対象に「グローバル・シチズン」の育成を目的として行ってきた SGH

スタディ（課題研究）に対する生徒・卒業生の受けとめを報告する。

ア 生徒アンケートより

SGH スタディに関しては、そのすべてが終了した段階（3学年前期末）にアンケートを実施することで、本取り組みについての生徒の認識を探ってきた。

SGH スタディを終えた生徒の、SGH スタディに対する総合評価とも言える設問「全体として、SGH スタディに取り組んだことは、あなたにとって有益でしたか」に対する生徒の回答（「6 有益だった」⇔「1 無益だった」の6段階）の、3年間の回答分布は下記の通りである。

【2016（平成28）年度】

6 : 46 人 (18.9%)	5 : 49 人 (20.2%)	4 : 54 人 (22.2%)
3 : 38 人 (15.6%)	2 : 29 人 (11.9%)	1 : 27 人 (11.1%)

加重平均して得点化したもの（〔評価Xを選択した生徒数×X〕の総和÷データ数）：3.85

【2017（平成29）年度】

6 : 40 人 (17.7%)	5 : 59 人 (26.2%)	4 : 51 人 (22.7%)
3 : 37 人 (16.4%)	2 : 27 人 (12.0%)	1 : 11 人 (4.9%)

加重平均：4.07

【2018（平成30）年度】

6 : 28 人 (12.3%)	5 : 42 人 (18.5%)	4 : 71 人 (31.3%)
3 : 41 人 (18.1%)	2 : 19 人 (8.4%)	1 : 26 人 (11.4%)

加重平均：3.74

ここからうかがえる生徒のSGH スタディの受けとめは3年間を通じて大きな変化がなく、「4割程度の生徒はSGH スタディを有益なものとして受けとめ、約2割の生徒は否定的である」というものになる。

これは、SGH スタディを毎週指導していた多くの教員の実感とも重なる。つまり、SGH スタディに積極的に取り組み、驚くような研究成果をあげる生徒が存在する一方で、残念ながら漫然と時間を過ごしてしまう生徒が存在したのである。このような課題探求的な学習では、通常の教科科目以上に生徒の意欲に差が見られるのであろう。

それゆえ、今後、SGH スタディのような課題研究を継続するとすれば、そして、それを全生徒に課すという教育課程をとるならば、課題研究に意欲的に取り組めない／取り組まない生徒への指導・支援のあり方が課題になると考えられる。

イ 高校での学びと大学での学びの接続

卒業生はSGH スタディを振り返ってどのような評価をしているか、高校卒業・大学入学後ほぼ1年たった卒業生にインタビューしたところ、SGH スタディの効果について次の点を挙げた。

- ① SGH スタディの研究活動を通じて、進路（大学での専攻）が明確になった。
- ② 積極的に動く習慣が身についた。

この卒業生は、「SGH スタディは、参加する生徒の自主性を開花させる触媒として機能している」とも述べており、SGH スタディへの取り組みが大学での学習／研究活動に結びついていることを示唆される。大学での学びでは、高校（まで）の学びと比べて飛躍的に自主性が求められるからである。

この卒業生の認識は SGH スタディに積極的に関わった生徒にかなりの部分、共通すると考えられる。

ウ SGH プログラムと生徒の変化

生徒の変化という点で、SGH スタディ以上に効果が大きいのは、意欲のある生徒を対象とした SGH プログラム（海外派遣・国際交流）である。

やはり高校卒業後 1 年たった別の卒業生は、自分が SGH プログラムの 1 つに参加したことの意義と現在の活動について次のように述べた。

- ① 海外で他国の高校生と交流する中で、「日本には分からないことや気づかないことが山ほどある」と知った。
- ② 自分の進路希望がより具体的なものになった。
- ③ 現在も、留学・インターンシップなど海外を訪れたり、国際的な活動に参加したりしている。

この卒業生の SGH プログラムに関する上のような認識は、SGH プログラム参加者にほぼ共通するものであろう。

教育の成果は短期間に測れるものではなく、このように、卒業生を追跡することで中長期的なスパンで SGH に関わる活動を評価することは、今後重要になると思われる。

（４）教師の変化について

本校は、筑波大学学校教育局の「先導的教育拠点」「教師教育拠点」という拠点構想との関わりもあって、教科教育－授業を教育研究活動の軸に据えてきた学校であり、また、個々の教員も「授業のプロ」としての矜持を強く持っている。また、それぞれの教科科目で、大部のレポートの作成やプレゼンテーションなど、探求的な学習で求められるものと共通する活動にすでに取り組んできたという自負もあった。

そのため、①教科科目を横断し ②教師による伝達でなく生徒による探求を中心とする という特徴をもつ SGH スタディに対して、当初、積極的でない教師もいた。

そのような教師の姿勢が、SGH 指定期間の 5 年間で完全に払拭されとはいいがたいが、SGH スタディのような活動に対する抵抗感は、特に 2・3 学年 SGH スタディを担当した教師のなかでは徐々に薄れていったと思われる。

SGH 校内推進委員会が制度設計した SGH スタディのあり方についても、当初は批判が多かったが、3 年の間に修正・改善を重ねたこともあり、教員もしだいに慣れてきたと言えよう。

そしてそのような教師の変化は、直接には、生徒の SGH スタディへの積極的な取り組みに影響されたものと言えそうである。

2016 年度の 3 学年 SGH スタディが終了した時点で実施した教員アンケートで、「SGH スタディに関わることで、生徒の見方や授業のあり方など、ご自身の考え方が変わった点がありましたらお書きください」という問に

- ① 自分の担当している授業では見えない、生徒の側面の発見
 - ② 生徒のプレゼンテーション能力の高さへの驚き
- などのコメントが寄せられたことはそのあらわれであろう。

（５）学校における他の要素の変化について（授業、保護者等）

授業への効果

本校は、過去においても課題解決学習に取り組んだ時期がある。また、通常の授業でも、レポートの作成、プレゼンテーションの機会が大変多い教育を続けてきた。その中で、「SGH」の指定を受けたことは、学校全体として今までの取り組みをまとめ、組織立てる良い機会となった。

新しい試みとして、第1学年では、授業形式で「課題解決のための基礎的スキル修得」講座を8講座開講し、2, 3学年の課題研究に備えるように組み立てた。この試みに対する外部の方や、指導委員の評価は高い。教科学習からだけでは得られない知識や作業方法に取り組ませることができ、大学や社会生活においても役立つであろうことを期待している。この授業の一部ではChromebookを使い、Google Classroomの利用を日常化した。この方法を全教員に伝達したことにより、課題の配布・回収にこのGoogle Classroomを利用することが通常の授業でも広がっている。SGHでの取り組みが、通常の授業にも効果をもたらした一つの例である。

外来者の増加による効果・外部への発信力の向上

平成26年度（SGH指定初年度）、27年度は、本校のSGHに関する取り組みの様子を視察に見える国内の先生方が急増した。特に、「SGHスタディ（課題解決学習）」における全校生徒での取り組みについてや、土曜授業実施に関する「働き方改革」との問題点の意見交換など、訪ねてくださった様々な先生方との情報交換は、本校にとっても、大いにプラスになるものであった。全国の学校が、「SGH」という同じ方向の目的を持ったそれぞれの取り組みを考え、情報を共有していったことは、「グローバル」に留まらず、高校の運営の面でもそれぞれの学校に刺激を与えたように感じる。また、「SGH活動報告会」の実施、「SGH研究開発実施報告集」の作成が義務付けられたことにより、発信する力も向上した。

平成27年度以降は、海外からの教育に携わる方々の来校も増加した。「SGH」の取り組みを直接視察に見えた方もいらっしやしたが、「グローバルな教育への取り組み」ということをHPなどで述べたことによる効果であろう。アメリカ、インド、カナダ、トルクメニスタン、北米、イスラエル、タイ、香港、ニュージーランドの教育関係者がそれぞれの目的を持って来校された。ここでも、国内に留まらず世界の教育事情を学ぶことができ、本校にとっても貴重な交流であった。

また、5年間を通じて、「講演者」として各界の方をお願いした。EU、国際連合、国際紛争調停官、大学教授、弁護士、大使館参事官の方などである。この中には本校卒業生も多数含まれた。「グローバルな視点」の講演ではあったが、生徒にとってはこれからの自分の道を模索する「キャリア教育」的な講演内容も多く、生徒への刺激は大きいものであった。

この様に多くの外来者を受け入れたことで、学校が外に開かれ、大変忙しくはあったが、付随して様々な効果があったと考えられる。これは、「SGH」に指定されたことによる効果と言えるであろう。

保護者の協力と意識の向上

「SGHプログラム（海外派遣）」の、シンガポール、中国の派遣に関しては「相互交流」での実施であり、それぞれにホームステイの受け入れを保護者をお願いした。また、平成28年4月に行われた、「G7 ジュニアサミット 東京プログラム」の本校での受け入れでも、同様の体制をとった。この5年間、多くのご家庭の協力を得ることができ、無事に交流が実施された。ホームステイでは、食事関係、健康管理など、様々な配慮が必要であるが、無事に大きなトラブルがなく過ごせているということは、保護者の「SGH」への理解と協力がなくしてはあり得ないことである。各家庭では、受け入れた各国の生徒達との交流が続いていると聞いている。

また、生徒の海外派遣希望者は年々増加し、1年間の留学制度利用者、学校外での海外派遣制度の利用者も増えている。生徒だけでなく、後押しする保護者の意識の向上の表れとも言えるであろう。

(6) 課題や問題点について

生徒の負担感と「グローバルな人材の育成」の難しさ

前述した通り、本校は通常の授業でもレポートの作成、プレゼンテーションの機会が大変多い。1学年次の授業形式での「課題解決のための基礎的スキル修得」講座に対する取り組みは効果を上げているが、2、3学年次の課題解決学習（グループを作ったの取り組み）に対しては、負担感を述べる生徒がいることも事実である。

特に3学年では、前期の間、毎週土曜日を「SGH スタディ（課題解決学習）」2時間のための登校としてきた。大学受験で追い込まれている生徒にとっては、大きな負担となっていたようである。今後は、2学年次で終了させる形を考えている。2学年での負担感は、幅広く様々なことに挑戦させている本校の生徒にとっては、忙しさが増した感が生まれたのであろう。

「グローバルな人材の育成」にコミュニケーション力の向上が必要であることは理解でき、その力を伸ばしていく取り組みなのだが、時間をかけてようやくグループを作っても、熱心には取り組むがグループを引っ張れない生徒と、その様な生徒に任せっきりの生徒がグループを形成する場合がある。研究の課題や目的は同じでも、グループ活動の時点でそれぞれに、気持ちの上で負担感を感じ、研究の成果が上がらないグループも見受けられた。長期間の取り組みだけに、グループ間の研究力の差がこの様な所からも生まれたようにも感じる。

教員の多忙感と「働き方改革」

「全生徒・全教員での取り組み」ということで、「SGH」は学校が一丸となって取り組んだ。教員の希望も取りながら全教員が何かしらに関わる体制を作り、「SGH」の組織作りも行った。一方で、教科指導の充実、行事・部活動への対応などは従来通りであり、そこに毎週土曜日「SGH」の授業が加わったことで、教員の多忙感は否めない状態であった。最終年度には、「修学旅行」の学習と繋げての指導を取り入れたが、時間的な問題は解決されていない。

また、海外派遣に関しては、希望生徒への説明会実施、公平な派遣者選考の実施など、長期間の準備が必要である。「課題解決学習」の為の海外派遣であるので、事前学習も時間をかけてじっくり行っている。この為の教員の仕事量も増加した。尚、海外派遣は長期休業中に実施しているが、引率の負担もかなり大きい。本校は、英語科の教員だけに負担がかからないように、引率も教員の希望を尊重して実施しているが、夏休みには、林間合宿、部活動の合宿の引率も重なり、海外派遣の引率希望も次第に少なくなってきた。特に「働き方改革」が前面に出てきている時でもあり、生徒も教師も「SGH」の効果を認めつつも、負担感のない取り組みの程度を見極めることが課題である。

「SGH スタディ（課題解決学習）」での配慮と課題

課題解決学習は生徒の机上の学習ではなく、様々な種類の活動が必要である。グループ活動時の担当教員は、必ずしも研究課題の専門家ではなく（ほとんどの場合が難しい）、あくまでも研究のアドヴァイザーである。よって、校外での情報収集活動も必要となる。この活動上での問題点があがった。

- ・校外活動時の安全確保 交通費の支給の仕方
- ・アンケートの取り方の指導

- ・民間の方へのアポイントの取り方と御礼の仕方の指導

高校生はまだ、自分中心の活動に陥る可能性が高く、相手方の都合への配慮、礼儀などに欠ける場面が多い。常に指導が必要であった。

(7) 今後の持続可能性について

本校では、グローバル・シチズンの育成プログラムとして「SGH スタディ（課題解決学習）」を、グローバル・リーダーの育成プログラムとして「SGH プログラム（海外派遣）」に取り組んできた。この5年間、学校全体が一つの方向に向かって進み、生徒もよくそれに答えて、「グローバル」な取り組みへの積極性を見せ始めた。それは、海外派遣希望者の増加にも見られる。また、取り組みを発信したことにより、本校受験生から「SGH」への期待も聞かれるようになってきている。

18歳成人が実施されることが決まり、高等学校基礎学力テストが間もなく開始され、新教育課程の検討が始まる中で、現在、高校教育には様々な要求が求められ始めている。「SGH」の取り組みの成果は直ぐに数字で表れるものではなく、取り組んだ生徒達の今後の歩む姿で検証できることであろう中、今後「SGH」の取り組みをどの様に継続させるかに議論が及んだ。

「SGH スタディ（課題解決学習）」

1学年の「課題解決のための技能修得」の授業は、内外共に高い評価を得てきた。最初は、「教員が指導したい内容」を尊重しての取り組みだったが、徐々にお互いの指導内容の検討をし、重複していた指導内容も改善されていった。大学生でも身につけていないと言われる基本事項をこの時期に教えることは、その後の学習の発展の為にも必要なことであり、今後も「総合的な学習の時間」として取り扱う方向である。ただ、2022年実施の新教育課程における「情報」では、この内容と同様な内容を取り扱うことも示されていることから、今後、教科教育との兼ね合いも視野に入れながら整理して指導していく必要がある。

一方、2、3学年で行っているグループでの課題解決研究は、前述の通り、平成31年度より2学年でのみの実施とすることとした。受験を控える3学年の負担感は大きかったことによることと、1年半という研究期間を充てることは長期過ぎるということもある。本校は、歴史的に「課題解決学習やプレゼンテーション」を授業に多く取り入れてきた。生徒にとっては、「SGH」としての研究と「授業」としての研究の両方に取り組まなければならないことが多々あることも事実で、生徒の側に立って課題量を精選していく必要もあると感じる。「SGH スタディ（課題解決学習）」の持続には、「検討と精選」がまず必要である。

「SGH プログラム（海外派遣）」

本校では、「SGH」指定以前より3か国（シンガポール、中国、韓国）との国際交流事業を行っていた。指定後は、カナダへのプログラムを新規に立ち上げ、より多くの生徒が派遣できるような仕組みを作り、実際に近年では応募者も増加している。また、意欲、英語力も共に向上している様に感じる。ようやく軌道に乗った所なので、このまま派遣事業を継続したい希望はあるが、指定解除後は生徒への費用補助ができなくなる。公平に派遣をさせたいと我々は望むが、なかなか難しいと感じるのも事実である。また、自走する為には教員の引率費用も捻出せねばならない。次年度は自走可能な範囲での実施とする計画を立て、既に生徒への募集もかけているが、現状維持をするのが費用の面でもようやくである。

では、海外派遣と同じ効果を期待できる取り組みはないのか？ということで考えてみると、

本校主催の国際会議の実施や、海外の方のより多くの受け入れということになる。施設設備の面からは、なかなか厳しいものがあるが工夫次第であろう。これまでの取り組みで、日常的に海外の方を受け入れる体制は作られ、ホームステイなどに関しても保護者の多大な協力を得ることができた。これを基盤にして工夫を重ねていけば、この様な取り組みも可能かと思われる。ただ、長期間の受け入れに関しては、様々な点からの検討が必要になる。今後の課題である。

本校は、「自主・自律・自由」をモットーとした教育方針を長年守り続け、多様な個性を持った人材を130年に渡って育ててきた。現在も、卒業生は各界で社会のリーダーとなって活躍している。現在まで行ってきた、授業・行事・部活動は、どれをとっても必要不可欠である。今回5年間で開発した「SGH」での新しい取り組みは、今後の社会生活に必要な素養を、生徒にとっても教師にとっても、考える良い機会となった。

本校が貫いてきた、また今後も貫いていくであろう「全人的人間の育成」という伝統的教育方針を忘れることなく、グローバルなトップリーダーを合わせて育てていくための仕組みは、この5年間で取り組んだ内容の「精選」によって作ることができると感じている。

【担当者】

担当課	附属高等学校	TEL	03-3941-7176
氏名	那須 和子	FAX	03-3943-0848
職名	副校長	e-mail	